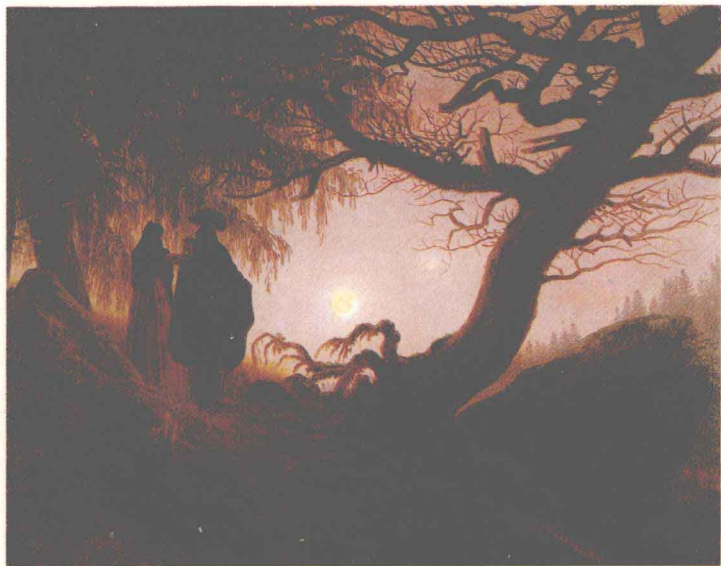
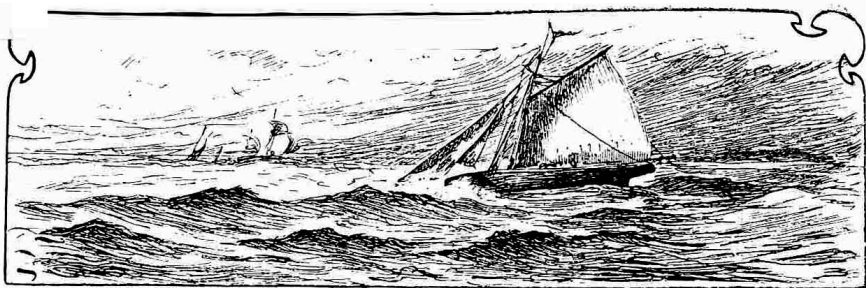


カーレン・ブリクセン

冬物語



渡辺洋美 訳



カーレン・ブリクセン

冬物語

渡辺洋美 訳

筑摩書房

著者紹介

渡辺洋美 (わたなべ・ひろみ)

大阪外国語大学中退。1973年、アイスランド大学卒業 (Bacc. phil. Isl.)。

主な訳書——ハルドール・ラクスネス『極北の秘教 (原題、氷河麓のキリスト教)』、ロレンス・ダレル『予兆の島 (原題、プロスペロの岩屋)』(以上、工作舎刊)、カーレン・ブリクセン『アフリカ農場——アウト・オブ・アフリカ』(筑摩叢書)。

冬物語

1995年1月15日 初版第1刷発行

著者	カレン・ブリクセン
訳者	渡辺洋美
発行者	森本政彦
発行所	獺筑摩書房

東京都台東区蔵前 2-5-3
振替 00160-8-4123
郵便番号 111

ISBN 4-480-83158-4 C1097

印刷製本 明和印刷 和田製本

© Hiromi Watanabe 1995 Printed in Japan

ご注文・お問い合わせ、及び乱丁・落丁本の交換は下記へ。

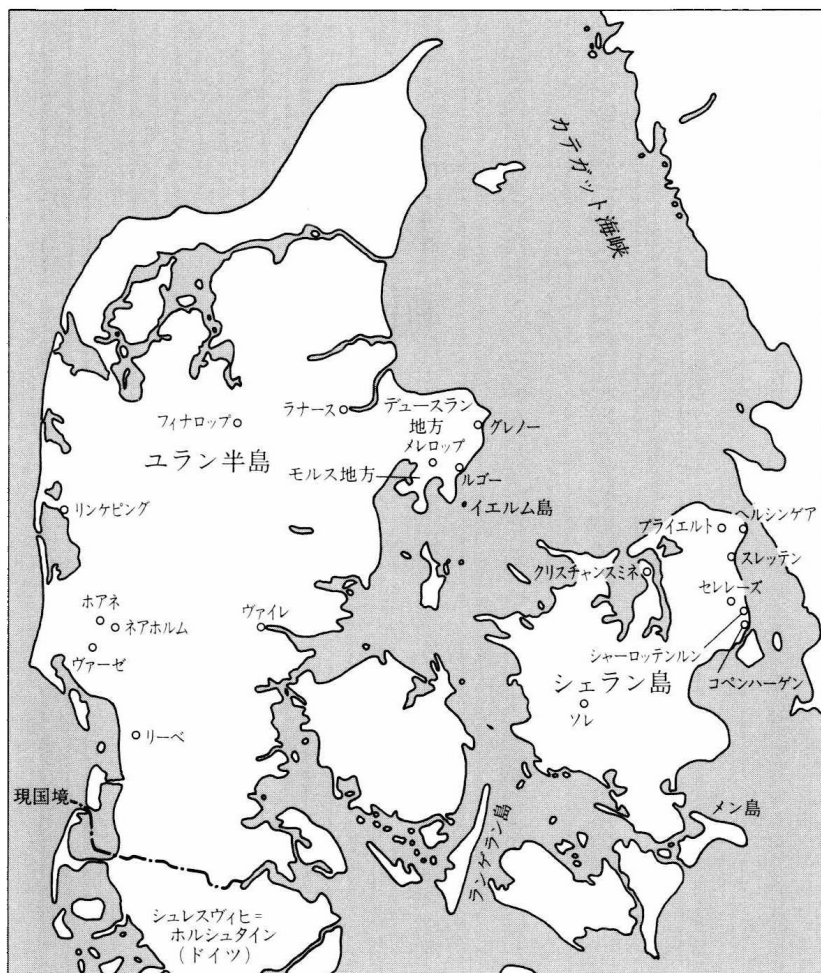
〒331 大宮市柳引町 2-604 筑摩書房サービスセンター

TEL 048-651-0053

目次

少年水夫の物語	3
カーネーションをつけた青年	20
真珠	50
ゆるぎない奴隷所有者	72
エロイーズ	102
夢見る子	124
魚——古きデンマークより	162
アルクメネ	186
ペーターとローサ	228
嘆きの畑	269
心のためになる物語	313

冬 物 語



デンマーク地図

少年水夫の物語

パーク帆船シャローツテ号は嵐のあとの曇天の下、高波の残る黒々した海をマルセイユからアテネに向かっているところだった。小柄な少年水夫のシモンは揺れる水浸しの甲板に立って、索につかま
ったまま流れ雲を、さらにメーンマストの上檣帆桁を見上げていた。じょうようほげた

帆柱の上で羽を休めていた鳥が、帆上げ索のゆるみに足をからませて、何とか逃れようと今、その高みでもがいているのである。羽をばたつかせ、頭を左右に振るようすが甲板から見えた。

この世ではだれしも他人をあてにせず、自力でやってゆかねばならない。シモンは自分の経験からそう確信するにいたっていた。それでもこの無言の死闘に一時間以上見とれていた。何という鳥だろう。この何日か、たくさん鳥がやってきて帆船の索具にとまっていた。ツバメ、ウズラ、ムクドリ、それに一度はつがいのはやブサまで。これははやブサだろう。何年も前、故郷の家の近くではやブサが、とまっていた岩から垂直に飛び立つのを間近に見たことがある。もしかしたら、あのときのやつかもしれない。少年は心につぶやいた。「ぼくみたいな鳥だな。あのときあそこにいたのに、今

はここにいる」

そう思うと、シモンのうちに仲間意識と、生きとし生けるものへの深い連帯感とが湧き上がって、はらはらしながら鳥を眺めた。あたりには冷やかしくくる水夫の姿はない。何とか索をつたい登ってハヤブサを助け出してやれないものか。額の髪をかき上げ、袖をまくり上げ、甲板をぐるりと見渡すと、少年は登っていった。ゆらゆら揺れる索具の上で二、三度休まねばならなかった。

マストのてっぺんにたどりついてみると、やはりそれはハヤブサだった。少年の頭が同じ高さに来ると、鳥はもがくのをやめ、黄色い目に怒りをこめてはたと睨みつけた。ナイフを取り出してひもを切るあいだ、片手で鳥を押さえておかねばならなかった。下を見るとひやりとしたが、同時にまた、人から言いつかつたのではない、自分の意志でここまで登ってきたのだという思いがあった。そこで少年はすっかりした誇らしい気持ちになった。まるで空と海、雲と鳥、そして少年自身がすっかり一体となったようである。ハヤブサは自由になるや、少年の親指に食いついた。血が流れ、すんでのことで鳥を放してしまうところだった。少年は怒って鳥の頭を小突いてやってから、上着のなかに押しこんで引き返した。

甲板に近づいたとき、航海士と厨房係が見上げていて、マストの上に何の用があるんだ、と怒鳴った。少年は力が抜け、涙がにじんだ。ふところから取り出して見せると、ハヤブサは手のなかでおとなしくしていた。男たちはハッハと笑って歩み去った。シモンはハヤブサを甲板に立たせてから、一歩下がって眺めた。しばらくして、甲板が滑りやすいので自力で飛び立てないのかと思ひ、もう一度抱え上げて、巻いた帆布の上に置いてやった。鳥はじきに羽づくろいを始め、二、三度頭を突き立て

たかと思うと、不意に飛び立った。灰色の海の波間の上に鳥の飛翔をたどることができた。少年は思った。「ぼくのハヤブサが飛んでいく」

シャーロット号が母港にもどると、シモンは別の船に雇われて乗り組み、二年後にはスクーナー帆船ヘーペー⁽¹⁾号の平水夫になった。船はニシンを買いつけに、ノルウェーのはるか北部の町ボデに来ていた。

ボデの一大ニシン市場をめざして、世界各地から船が集まってきた。スウェーデン、フィンランド、デンマーク、ロシアの船がマストを林立させて並び、陸ではさまざまな言葉と派手な喧嘩によつて、騒然とした逞^{たくま}しい人生模様が繰り広げられていた。岸壁に露店が立ち並び、シモンがこれまで見たこととなかったラップ人が、ビーズ刺^し繡^{ゆう}した革製品、トナカイの角製のボタンやナイフの柄を売りに船に立ち寄った。用心深い目をしたおとなしい小柄な黄色い人たちだった。五月初旬のことである。空と海は見つめていられないほどに澄みわたり、塩っぽく、果てしなく広がって、まるでだれかがひっそりなしにナイフを研いでいるように、あたり一面と上空に、甲高い鳥の声が満ちていた。

シモンはここが明るいのに驚いた。それが一日じゅう続くかのようなのである。地理の知識もないので、緯度の高さのせいにするかわりに、世界が異例の親切を見せ、恩寵^{おんちゆう}を示してくれているものと理解した。少年はこれまでずっと歳のわりに体が小さかったが、この冬、急に背が伸びて、手足が丈夫になった。この幸運は晴れやかな大気と出どころが同じで、世界の新しい慈悲心から湧いてくるにちがいないと思った。もともと内気にできていたので、励みになるものが必要だったのだ。これ以上願うことはない。あとは自分で片づけるまでだ。少年は悠然^{ゆうぜん}と歩き回った。

ある晩、少年は上陸許可をもらつて船を降り、小柄なロシア商人の露店に立ち寄つた。商人はユダヤ人で、金時計を売つていた。船乗りたちは皆、その時計が質の悪い金属でできていて、動かないとわかつていながら、やはり買つてしまい、それを見せびらかして歩いた。シモンは長いあいだ時計を眺めていたが買わなかつた。老商人の店に並んでゐるさまざまな品のなかにオレンジの箱があつた。シモンは航海中にオレンジの味を覚えるようになっていた。そこで一個買つて持ち歩いた。海の見える丘に登つてオレンジをしゃぶろうと思つたのである。

歩いていくうちに町はずれに来ていた。ふと気がつくと、柵の向こうに色あせた青い上つ張りを着た少女が立つて、こちらを眺めている。年の頃は十三、四、ウナギのようにひよろつとしてはいるが、色白でそばかすのある顔は丸く、髪を長いお下げに結つていた。ふたりは見つめ合つた。

「だれのことを見張つてゐるんだい？」シモンは何か言おうとして、そう聞いた。

少女の顔にきらきらした生意気な笑みが浮かんだ。

「あたしが結婚する男の人に決まつてゐるじゃない」

少女の表情の何かで少年は自信がついてうれしくなり、にやりとしてみせた。

「そりやぼくのことかな」

「べえーだ。その人はもうちょっと年上なんだもん」

「そんなこと言うけど、君だつてまだ子供じゃないか」

少女はもつたいつけてかぶりを振つた。

「そうね。けど大きくなつたらすごい美人になつて、帽子をかぶつてハイヒールをはくのよ」

「オレンジ、いらない？」

少女が並べてみせた品を贈ることのできないシモンは聞いた。少女はオレンジを見、少年を見た。

「おいしいよ」

「じゃ、どうして自分で食べないの？」

「ぼくはもうさんざん食べたんだ。アテネにいたときにね。ここじゃ一個一マルクもするけど」

「あんた、何て名前？」

「シモン。君は？」

「ノラ。で、このオレンジのお代に何が欲しいの、シモンさん」

少女の口から自分の名前が出て、シモンは大胆になった。

「オレンジのかわりにキスをひとつくれる？」

ノラは一瞬真顔で少年を見つめた。

「いいわ。キスしてあげる」

少年は全力疾走してきたように体が熱くなった。少女が手を出してオレンジを受け取ると、少年は手首を握った。そのとき家のなかから少女を呼ぶ声がした。

「父さんだわ」

少女はオレンジを返そうとしたが、少年は受け取らなかった。

「それじゃ明日来て。キスしてあげるから」と口早に言うなり少女は走り去った。少年はそのあとを見送ってたたずんでいたが、しばらくして自分の船にもどった。

シモンは先の計画を立てる習慣がなく、今も自分が明日少女のもとへ行くかどうか知らなかった。つぎの晩、ほかの水夫たちが下船するので、シモンは船に残っていなければならなかった。だからといって気に病むでもなかった。船で飼われている犬のバルタザールと甲板にすわって、せんだって買った手風琴^{コンサティナ}の練習をするつもりでいた。明るい夕暮れがあたりを包んでいた。空はほのかな薔薇^{ばら}色を帯び、海はすっかり凪^ないで、薄めたミルクのように色がなく、岸に向かう小舟がそこを割っていくと、藍色^{あい}の条^{すじ}ができるばかりである。シモンはすわりこんで弾いた。しばらくすると、自分の奏でる音が語りかけてきた。それがあまりに力強いので、少年は弾き止めて立ちあがると上を向いた。すると満月が中空にかかっていた。

空は月がいらないくらい明るかった。まるで月は自分の気まぐれから出てきたとでもいうふうである。丸く落ち着きはらって生意気だった。それを見ているうちに、何としても陸に行かねばならないことがわかってきた。だが、ヨール（小帆船）はほかの者たちが乗って出でしまっているの、抜け出すべきがない。船にひとり残された少年水夫の小さな人影となつて長いあいだ甲板に立ちつくすうちに、もつと沖の船から陸に向かっているヨールが目にとまり、少年は手を振った。ロシアのスクーナー帆船アンナ号の乗組員が上陸するところだった。意がつたわると、ロシア人たちは少年を乗せてくれた。最初、船賃を要求したが、あとで笑いながら返してくれた。シモンは思った。「こいつら、ぼくが女を買いに町に出ると思つてやがるな」。そこで自負心から「そのとおりさ」と考えた。「でも、やつぱり全然ちがう、やつらは何もわかつちやいない」

岸に着くとロシア人たちは、いっしょに一杯やりに行こうと言ひ出した。少年は船に乘せてもらつ

た手前、断るわけにいなかった。ひとりには熊のごとき巨漢で、イワンという。イワンはたちまち酔っぱらって、熊じみた親愛ぶりで少年にのしかかり、背中は叩くわ、面と向かつてにこにこ笑いはするわ、金鎖はくれるわ、しまいには両方の頬べたにキスするありさまだった。そこでシモンは、自分もノラと再会したら贈り物をしなくてはと思い、ロシア人たちと別れると、なじみの露店に直行して青い小さな絹ハンカチを買った。ノラの目と同じ色である。

土曜の夜のこと、家々のあいだに人が大勢繰り出し、列を連ねて、あるいは高歌放吟しながらやってきた。だれもが今宵を楽しもうとうずうずしている。満月の下、めくるめく喧騒世界のただなかで、シモンは船を脱走したうえに強い酒が入ったおかげで酔い心地でいた。ポケットのハンカチをまさぐってみた。これまでさわったこともない絹である。自分の女への贈り物なのだ。

シモンはノラの家に行く道を忘れて迷っているうちに、もとの場所にもどってしまった。そこで、もう間に合わないのではないかという心配がつのるあまり走りだした。木造小屋にはさまれた狭い小路で大男と鉢合わせした。またもやイワンである。ロシア男は少年を両腕で抱え、万力のように締めつけた。

「これはこれは」とイワンはうれしそうな声を上げた。「わしのかわいいひよつ子を見つけたぞ。あちこち捜したぞ。友達がいなくなつて、かわいそうなイワンは泣いたよ」

「放してよ、イワン」

「おっほう。さあ、いっしょに行こう、好きなものをやろう。わしの心も金もおまえのものだ、みんなおまえのものだ。わしだつて十六だったことがある、神さまのちっちゃな小羊だったことがある。」

今夜またあのころのようにになりたいものだ」

「放せたら！ 急いでるんだ！」

イワンは痛いほど少年を抱きしめ、片手で撫でさすった。

「よしよし、わしにまかせておきながら、いい子だから。もう絶対に離ればなれにならないからな。

—— おや、人が来るわい。—— 今夜はいっしょに過ごそうじゃないか、おまえがおじいちゃんになっても忘れられんような夜をな」

イワンは突然、羊をさらっていく熊さながらに少年を抱きしめて、まともに口にキスした。男の熱い体の忌まわしい感触、のしかかってくる巨体に、細身の少年は逆上した。かすんだ大気のなかでノラがか細い船のように待っているというのに、自分はどうして毛むくじやらの獣の熱い抱擁のなかにいるのだ。少年はありったけの力でイワンを打った。

「殺してやるぞ、イワン、放してくれなきや」

「なあに、あとになりや、わしに感謝するさ」と言っただけでイワンは歌い始めた。

シモンはポケットのナイフを探り、片手で開いた。手は上がらなかつたが、怒りにまかせて大男の脇の下にナイフを根元まで突き立てた。たちまち温かい血が袖口にほとばしり流れるのを感じた。イワンは歌を中断し、ふた声低くうなり、つぎの瞬間、膝を折った。「哀れなイワン、哀れなイワン」とうめいて、前のめりにばったり倒れた。そのときアンナ号の船乗りたちが歌いながら小路に入ってくるのが聞こえた。

少年はいつとき立ちつくし、ナイフをぬぐいながら、巨体の下で血が黒く溜まっていくのを眺めて

いた。それから走った。方角を定めるため立ち止まったとき、水夫たちが仲間の死体を見て悲鳴を上げるのが聞こえた。海のほうに下りて手を洗わなければ、と思った。それなのに反対方向に駆けていた。ほどなくすると昨日の道に出ていた。それは今までずっと行き来してきた道のように親しく感じられた。

歩調をゆるめてあたりを見回した。すると不意に柵の向う側にノラが立っているのが目にはいった。月光のなかに姿を認めたとき、少女は間近にいた。少年は息を切らしたままその前にうずくまり、しばし言葉もなかった。少女は見下ろした。

「こんばんは、シモン」。すっかりした小声で少女は言った。「長いことあんたを待ってたのよ」。それから間を置いたあと続けた。「オレンジは食べちゃったわ」

「ああ、ノラ」。少年は声を高めた。「人を殺してしまった」

ノラは少年をじっと見つめていたが、動かなかった。しばらくして言った。

「どうして人を殺したの？」

「ここに来るため。ぼくを引き止めようとするんだもの。友達だったのに」。少年はのろろと立ち上がった。「あいつ、ぼくのことを好きだったんだ！」

そう言い捨てると、おいおい泣きだした。

「そうなの」。ノラは考えこむようにゆっくり言った。「早くここに来なきゃと思ったのね」

「かくまってくれるかい？ やつらが追ってくるんだ」

「だめよ、できないわ。だって父さんはボデの牧師だもの。あんたが人を殺したってわかったら、き

つとあいづらに引き渡してしまおうわ」

「じゃ、何か手を拭くものを貸してよ」

「手をどうかしたの？」

ノラはこころもち前に踏み出した。少年は両手を差し出した。

「それ、あんたの血？」

「ちがう。やつの血だ」

少女はもとの位置にあとじさった。

「もうぼくのこと嫌いかい？」

「ううん、嫌いじゃないけど、手はうしろにやって」

シモンが言われたようにすると、ノラは柵に近寄って、少年の首を抱きかかえ、若い体を押しつけてやさしくキスした。少年は月光のように冷たい顔を自分の顔の上を感じた。少女が身を離すと、少年はめまいをおぼえ、そのキスが一秒で終わったのか、それとも一時間続いたのかわからなかった。ノラは目を見開いてすつくと立っていた。

「さあ、約束するわ」と少女はゆっくり誇らしげに言った。「生きてるかぎり、ほかのだれとも結婚しないって」

シモンは少女に後ろ手に縛られたような姿で立ちつくした。

「もう逃げて。あいづらが来るわ」

ふたりは見つめ合った。

「ノラのことを忘れないで」

少年は踵を返すと駆けた。

柵をひとつ、またひとつと飛び越えていったが、家々のあいだに出ると足取りをゆるめた。どこへ行くというあてもなかった。音楽と人声が流れだしている家にさしかかって、少年はゆっくり扉をくぐった。部屋は人であふれ、踊りの真っ最中である。天井からぶら下がったランプが人々に光を投げかけ、床から立ちのぼる埃で空気は茶色によんでいる。女も何人かいるが、たいがい男同士で踊っている。真剣に、あるいは笑いながら床を踏み鳴らした。シモンがホールにはいつてすぐ音楽がやんだ。ひとりの船乗りが弦楽器を持って進み出て、調子をとのえると、群衆は壁ぎわに退いた。ふたりのロシア人水夫が故国の踊りを披露しようというのである。

シモンは思った。「もうじきあの船の男たちがやってきて、仲間を殺した下手人を捜してまわるだろう。で、この手を見れば、ぼくがやったとわかるだろう」。汗まみれになつて陽気に踊る人たちに囲まれて、ダンスホールの壁ぎわに立っていたこの五分が、少年には果てしなく意味深いものに思われた。自分でもそのあいだに、ほかの人たちと同じ大人になったように感じた。自分の運命に嘆願することも、不平を並べることもなかった。自分はここにいる、男を殺し、娘にキスをした。それ以上人生に求めることはない。人生のほうでもそれ以上彼に求めなかった。彼はシモンだ、まわりの男たちと同じ男で、だれしも一度は死ぬように死ぬだろう。

ひとりの女が入ってきて、初めて少年は自分の外で起こっていることに気がついた。女はダンスフロアの中央に立って、あたりを見回した。ラップ服姿のずんぐりした老女で、その場がすべて自分の